

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 4 月 28 日現在

機関番号：32644

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25350733

研究課題名(和文)「感性教育」としての「身体教育」の研究

研究課題名(英文) A Study of the Physical Education as the Education for the Japanese sensibility(kansei)

研究代表者

久保 正秋 (KUBO, MASAOKI)

東海大学・体育学部・教授

研究者番号：30119672

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は「感性」を育むための「身体的体験」と「身体教育」の可能性を探ることを試みた。その結果は次の通りである。1) 身体的体験は、何らかの功利的な事項を生み出す手段と化してしまい、感性を育めない。2) 身体的体験において「社会システム」から「エコシステム」へ溶解することが感性教育における可能性である。3) 「感性」を育むための教育は、意図的、功利的に実践され、それは「感性」を育むことはできない。

研究成果の概要(英文)：This study tried to investigate the possibility of the physical experience and the physical Education as the nurture for KANSEI(sensibility) .The result of this examination were as follows: 1) The physical experience devise means to bear the practical matters and can not nurture KANSEI(sensibility) . 2) The physical experience in the social system can dissolve in the eco-system, this is the possibility of the education for KANSEI(sensibility) . 3) The education for KANSEI(sensibility) practice intentionally and practically, therefore it can not nurture KANSEI(sensibility) .

研究分野：総合領域

キーワード：身体教育 感性の教育 身体的体験 体験活動

1. 研究開始当初の背景

本研究は「感性の教育」を「身体教育」という立場から再検討することを試みる研究である。そのために、感性を育むと言われている「体験活動」における「体験」を「身体的体験」として捉え直し、その「身体的体験」がどのようにして「感性」を育てていくのかの理論的な検討を行った。本研究はこれまでに、研究課題名：地域における総合的「身体教育」のための「場」の検討：平成 15-16 年度基盤研究 C-2 (課題番号 15500420)、研究課題名：地域における総合的「身体教育」のための「メディア」の検討：平成 17-18 年度基盤研究 C-2 (課題番号 17500408)、及び研究課題名：地域における総合的「身体教育」のための「体験」と「教育的空間」の検討：平成 19-20 年度基盤研究 C-2 (課題番号 19500512)の研究助成を受け、総合的「身体教育」とその「体験」に関する研究を進めてきた。さらに、研究課題名：「体験活動」における「身体的体験」の研究：平成 22-24 年度基盤研究 (課題番号 22500551)の研究助成を受け、「体験活動」における「身体運動」の位置づけを検討し、「身体的体験」と「生成の体験」との関連を検討した。今回の研究は、これら一連の研究の最終段階に位置づくものであり、最終的には「感性教育」としての「身体教育」を考察した。この研究成果は体育哲学領域における人間形成論の理論的発展に寄与するのみならず、実践的な「体験活動」の開発にも貢献するものと考えられる。

2. 研究の目的

本研究は「体験活動」における「体験」を、「身体的体験」として捉えなおし、その「身体運動」を中心とした「身体的体験」による「感性教育」を構築しようと試みるものである。従来の「体験活動」における「体験」は、一過性の「経験」や知識としての理解に止まっているという現状があり、それは「身体的体験」として考える必要がある。「感性」が「世界のなかで自己の配置を感じる能力、世界と自己との相関を感知する能力」であるならば、「身体的体験」の中で、この感じる力、すなわち「感性」を養うことが可能となるのである。本研究はこの「身体的体験」の「感性教育」としての可能性を探ることを目的とする。

3. 研究の方法

(1)本研究ではまず、1)「感性」と「感性教育」に関する理論的検討、および「感性教育」の現状を明らかにするために、1-1)美学を中心とした「感性」に関する理論、及び教育学において展開されている「感性教育」に関する理論を検討する。さらに、1-2)「感性教育」

の実態を調査する。ここでは実際の「感性教育」においてどのようなプログラムが展開されているかを調査し、そのカテゴリー化が図られる。この二つの方向から、「感性」と「感性教育」の理論的展開、及びその現状を明らかにする。

(2)次に、2)「感性教育」と「身体的体験」の関連について明らかにするために、2-1)「感性」と「身体的体験」に関する理論を検討する。「感性」と「身体的体験」に関しては湯浅泰雄の「身体論」、および中井正一、樋口諭らの「スポーツ美学」に関する理論を検討する。また、教育哲学における「意味生成の理論」に基づいて「身体的体験」と「人間生成」の関連を明らかにする。さらに、2-2)「感性教育」における「身体的体験」の分析を行う。ここでは、「感性教育」のプログラムにおいて「身体的体験」がどのように位置づけられているか、あるいは位置づけることが可能かを明らかにする。これらのことによって、「感性教育」という観点からの新たな「身体教育」のプログラム化のための基本的事項を明確にする。

(3)最終的に、以上の理論的検討と調査に基づいて3)「感性教育」としての「身体教育」のプログラム化を試みる。そのために、3-1)「感性」を育むことを目的とした「身体教育」のモデルプログラムを作成する。次に、3-2)モデルプログラムの有効性を検証する。これらの結果に基づいて、再度、「感性」と「身体的体験」の関連に関して論考を進め、「感性教育」としての「身体教育」の可能性を探る。

4. 研究成果

(1)本研究はまず、課題 1-1)「感性」に関する理論、「感性教育」に関する理論の検討、課題 1-2)「感性教育」の実態調査を行った。課題 1-1)に関しては、従来の「客観的・量的時間」ではなく「垂直的時間」と呼ばれる時間認識に基づいて「感性教育」を捉え直すことを試みた。その結果、以下の点が明らかとなった。

1)「客観的・量的時間」は「現在」から「未来」へと直線的に連続して続いている。そして現在という時間は目的(未来)を達するための手段となる。同様に感性教育における身体的体験も結果の生産のための手段となる。身体的体験は、その体験の今(現在)感じていることよりも、その後生じる、何らかの功利的な事項を生み出す結果の手段と化してしまう。

2)感性教育において「垂直的時間」という時間認識は重要である。何故ならば、その身体的体験の瞬間に、意味が生成し、感性を育むことができるからである。身体的体験の瞬間(現在)が本質であり、結果(未来)のた

め的手段ではない。

以上の理論的考察を身体教育という観点から纏め、体育哲学研究に投稿し、受理された。

課題 1-2) に関しては、現状の「体験活動」プログラムにおいてどのような「感性教育」が生起しているかの実態を調査した。その結果、多くの「体験活動」プログラムが、その体験の結果としての何らかの効果を求めることに重点を置き(例えば、田植え体験において求められているのは食物や農家に対する感謝などであり、素足で泥の中に入る、あの何ともいえない感覚は注目されない)、「客観的・量的時間」に支配されている現状が明らかとなった。

(2)次に本研究は、課題 2-1)「感性」と「身体」に関する理論的検討、課題 2-2)「感性教育」における「身体的体験」の調査、分析を行った。

課題 2-1) に関しては、湯浅泰雄の「身体論」を検討し、身体と精神の二重構造における基底の構造に注目した。そしてその無意識の領域にある種の「身体図式」が存在することを論じた。詳細は以下の通りである。

1) 身体運動において、「身体図式」は「他者」「もの」「自己の(生理的)身体」と同調し、その時、美的体験を生じさせる。

2) 「身体図式」の同調は自己と世界との関係を変容させる。

3) それは「社会システム」から「エコ(自然)システム」への溶解であり、その時、「我-それ」関係(プーバー, M)であったものが「我-汝」関係へと変容する。ここに「感性教育」における身体(身体運動)の可能性をみることができる。

以上の理論的考察をスポーツ運動体験という観点から纏め、体育学研究に投稿し、受理された。

課題 2-2) に関しては、「体験プログラム」における「体験」の意味を検討するために、ツーリズム体験を対象として調査を行い、美的体験の理論に基づいて分析を行った。結果の概略は以下の通りである。

1) ヘリテージツーリズムの理論は、自己を遺産の一部として位置づけ、その体験を重要視することを主張している。効果的なツアープランは多くの経験を生じさせるが、ツーリストたちは自己を遺産の一部として位置づけることはできない。

2) 美的体験の基礎となる「快」は生理的快、観念的快、感性的快に分かれるが、感性的快が最も重要である。

3) 一般的なツーリズムにおける体験は、有名な、よく知られたモノを見た、という満足感(観念的快)を提供するものであり、感性的快(美的体験)を生起させることはない。

以上の調査結果、分析を纏め、東海大学紀要(体育学部)に投稿し、受理された。

(3)これらの研究成果に基づいて本研究は、「感性教育」としての「身体教育」のプログラム化を検討した。課題 3-1)「感性」を育むことを目的とした「身体教育」のモデルプログラムの作成、課題 3-2) モデルプログラムの有効性の検証を行った。

課題 3-1) に関しては、湯浅の「身体論」を中心として身体と精神の二重構造における「感性教育」の理論的検討を行った。その結果、一般的な教育のプログラムでは「感性」を教育することが困難であることを明らかにした。つまり「身体図式」の同調は、自己と世界との関連を変容し、「社会システム」から「エコ(自然)システム」へと溶解し、そこに身体(スポーツ運動)による「感性教育」への関わりを認めることはできるが、その教育を意図的に、功利的に実践することでは「感性」を育むことはできないという矛盾である。このような理論展開のペースとなる理論的検討を継続し、体育学研究に投稿し、受理された。

課題 3-2) においては、様々な「身体的体験」とそれによる「感性教育」の事例を検討した。しかしながら、課題 3-1) の検討において明らかにされたように、有効的に体験プログラムを作成することは「感性」を育むことと矛盾する。教育における体験プログラムは、「社会性」を身につけることを重要とし、「感性」を育むことは明らかに異なる。つまり、重要なのは観念的に有効な「観念的快」となり、対象に身をもってかかわることによる「感性的快」を求めることが減少していくのである。以上の理論的検討の結果、考察をまとめ、東海大学紀要(体育学部)に投稿し、受理された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

久保正秋、「体育における人間形成」論の批判的検討 8 —身体教育における時間性的問題—、体育哲学研究、査読有り、第44号、2013、13-22

久保正秋、ツーリズムに見る「体験」の意味、東海大学紀要体育学部、査読有り、第44号、2014、109-116

久保正秋、意味生成としての「スポーツ運動」体験の構造、体育学研究、査読有り、第60号(2)、2015、617-633

久保正秋、「感性」と「身体的体験」、東海大学紀要体育学部、査読有り、第45号、2015、1-9

[学会発表](計1件)

久保正秋、The Value of the Experience of Sports Movements、Incheon Asian Games International Sport Science Congress、2014 (Gyeongin National University of

Education)

6 . 研究組織

(1)研究代表者

久保 正秋 (KUBO MASA AKI)

東海大学・体育学部・教授

研究者番号 : 30119672

(2)研究分担者 なし

(3)連携研究者 なし